

あまんじゅこのいたずらさがし

「大人」の子孫らしいあまんじゅこは、いつもいたずらをしては喜んでいました。

【いたずらその1】

中区の真ん中あたりに太子山と丘山というあわんをふせたような形の2つの山が並んであります。

ある日、あまんじゅこはこの2つの山を動かして、里の人たちを驚かそうと思いました。

そこで、2つの山を天秤のようにつりあげてうごかそうと長い石の棒をさがしてきました。その石を天秤棒にしてつりあげようとすると、ボキンと折れてしましました。



丘山と太子山（中区）

時が流れて、村の人たちが村の中を流れる川を掃除していたらその折れた石の一部を見つけたと伝えられています。それが、奥中に残っている「長石」のいわれです。



あまんじゅこの長石（中区奥中）

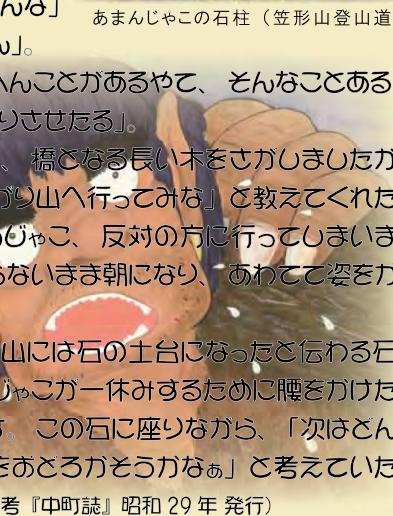
【いたずらその2】

ある日の夕方、里の子どもたちが夕焼けの空を見ながら「妙見山と笠形山に虹のような橋がかかるたらきれいやろなあ」と話しているのを耳にしました。「あまんじゅこったら、大きくて力持ちやから橋がかけられるかもじれへんな」「なんぼ大きいすごい力持ち言うても、あがんあがん」。

それを聞いたあまんじゅこは「何やて、わいにつけへんことあるやて、そんなことあるかい」、「見られ、一晩のうちに橋をつくって、びっくりさせたる」。

暗い中、石をつがって土台をつくりました。そして、橋となる長い木をさがしましたが見つかりません。そこへふくろうがやってきて「どんがら山へ行ってみな」と教えてくれたのです。そこはあまんじゅこ、反対の方に行ってしまひました。どうとう見つからないまま朝になり、あわてて姿をかくしてしまひました。

橋をつくっていた笠形山には石の土台になったと伝わる石柱があります。あまんじゅこが一休みするために腰をかけたという石も残っています。この石に座りながら、「次はどんないたずらをして里人をあざろかうがなあ」と考えていたあまんじゅこの腰掛石（中区曾我井）かもじれませんね。（参考『中町誌』昭和29年発行）



OH!TAKA・DA 風土記

昔、大人（おおひと）がいました。

この大人が、南の海から北の海へ、さらに東に巡回したときに、この土地にやってきて言いました。

「ほかの土地は低かったので頭がいつも天につかえるから、身をかがめて歩いたけれど、この土地は天が高いので、体を伸ばして歩ける。高いなあー」。

そこで、この地を託賀郡（たかのこおり）というようになりました。また、大人の踏んだ足跡は、たくさんの沼となりました。

*『播磨国風土記』託賀郡条より（現代語訳）

託賀郡ニ多可郡

ふ ざ き 風土記とは



古代播磨国と託賀郡

元明天皇の時代、和銅6年（713）5月2日に、諸国に向けてある命令が発せられました。

「郡郷（里）にふさぎ名前を付けよ。鉱物・植物など郡内の特産品や土地の肥沃さ、地名の由来や古考の伝える旧聞・異事を（朝廷に）報告せよ」という命令です。諸国から提出された報告書（解）は、後に『風土記』と呼ばれるようになります。

現在、その写本が伝えられ、1300年前の姿を知ることができる国は、常陸国・出雲国・肥前国・豊後国、そして播磨国のわずか5力国だけです（後の書物に引用された「逸文」が残るのは20数力国ほど）。

その頃の播磨国には12の郡（こおり）がありましたが、その内10郡の記述が残っています。その一つに託賀郡（現在の多可町～西脇市周辺）があります。